実践交流
小学国語
―低学年―

俳句 はいくにチャレンジ！
～生き生きと表現し、ともに学び合う児童の育成～

愛媛県松山市立久米小学校　高須賀　智子

一　はじめに

本校では、国語科を中心に、伝え合う力をはぐくむ授業を創造する取組を推進することにより、自分の思いを生き生きと表現し、ともに学び合う児童の育成を目指し、研究を重ねている。

言葉とかかわり、言葉を通して表現し、豊かに伝え合う力を育てる方策の一つとして、簡単で楽しく、実り多い俳句の取組を一年生の実践を例に紹介したい。

二　「はいくにチャレンジ！」

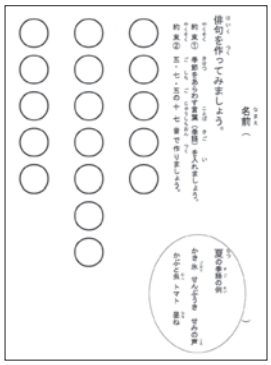
五・七・五のリズムに慣れ、俳句に親しむことと、句作や鑑賞を通して言葉や季節への感覚や感受性を高め、言葉の豊かさを楽しむことをねらいとして、ひらがなもしっかり覚えた二学期から実施した。

〈初めの指導〉

一年生への俳句指導のため、五・七・五の十七音で作ること、季節を表す言葉（季語）を一つ入れること、「うれしいな」「たのしいな」の言葉を使わないことを、始めに指導した。音数の数え方についても「チュ・ー・リ・ッ・プ」や「シャ・ー・ベ・ッ・ト」で確認した。

〈句会ライブ〉

例年、講師の先生を招いて全校で句会ライブを実施している。「取り合わせ」について学び、鑑賞の楽しさを知って、このライブでぐっと気持ちが盛り上がる。季語を他の季語と入れ替えるだけで、より自分の気持ちに近い俳句が生まれることに驚き、一年生なりに工夫が見られるようになった。



〈導入時のワークシート〉

〈覚えておきたい俳句〉

小学生が覚えておきたい俳句も紹介した。声に出して繰り返し詠み、松山市とかかわりの深い子規さんの俳句を味わったり、市内に立つ句碑について話し合ったり

覚えておきたい俳句①

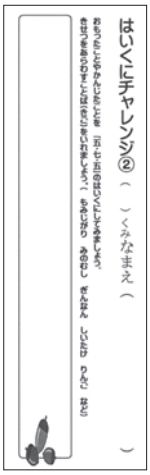
菜の花や月は東に日は西に　与謝蕪村
夏かわを越すうれしさよ手にぞうり　与謝蕪村
ぼたん散って打ち重なりぬ二三べん　与謝蕪村
戸に犬の寝がえる音や冬ごもり　与謝蕪村
春の海ひねもすのたりのたりかな　与謝蕪村
雪とけて村いっぱいの子どもかな　小林一茶
我と来て遊べや親のないすずめ　小林一茶
やせ蛙まけるな一茶これにあり　小林一茶
雀の子そこのけそこのけお馬が通る　小林一茶
やれ打つなはえが手をすり足をする　小林一茶
うまそうな雪がふうわりふわりかな　小林一茶
大根（だいこ）引き大根で道を教えけり　小林一茶
梅一輪一輪ほどの暖かさ　服部嵐雪
赤い椿白い椿と落ちにけり　河東碧梧桐
校塔に鳩多き日や卒業す　中村草田男
万緑の中やあ子の歯生え初むる　中村草田男
山路来て何やらゆかしすみれ草　松尾芭蕉
古池やかわずとびこむ水の音　松尾芭蕉
五月雨をあつめて早し最上川　松尾芭蕉
夏草やつわものどもが夢の跡　松尾芭蕉
しずかさや岩にしみ入るせみの声　松尾芭蕉
秋深き隣は何をする人ぞ　松尾芭蕉
初しぐれ猿も小のみをほしげなり　松尾芭蕉
旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる　松尾芭蕉
あらうみや佐渡に横たう天の川　松尾芭蕉
目には青葉山ほととぎす初かつお　山口素堂
夏嵐机上の白紙飛び尽くす　正岡子規
赤とんぼ筑波に雲なかりけり　正岡子規
柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺　正岡子規

〈名句の紹介〉

した。「のたりのたり」の擬態語を喜んだり、「や」や「けり」の切れ字を知って、また一歩上達。

〈投句用紙〉

用紙はA4の縦半分の大きさが書きやすく適当であった。季語を少し載せて、季節のイラストを添え、季節感を出した。学年末には、綴って自分の句集となることを知らせ、句集の表紙も作って意欲化を図った。



〈俳句用紙〉

〈句作と鑑賞〉

国語科の時間を活用したり、休み時間に句作したりした。家にも持ち帰り、家の人とも一緒に作った。

集まった句は、ミニ句会を開き、だれの句か分からないようにして「今月の句」を選んだ。友達に選ばれる嬉しさから、次の句作に一層意欲的に取り組んだり、選んでくれた友達にお礼を言ったりするほほえましい姿も見られた。

〈選句〉

一年生百五十名の中から、毎月五名程度入選句を決定し「俳句賞」とした。

選句に当たっては、

○　季語は原則として一つ。
○　生活感のある子どもらしい句を選ぶ。
○　言葉の響きやリズム、表現のよさを重視する。
○　レベルを維持するため、選ばれない学級もある。同じ児童の句が選ばれることもある。

の四点に留意した。

入選句（俳句賞）

かけっこでいっしょにはしったあきのかぜ
コスモスのみちをあるいてじいちゃんち
ひがんばなよりみちをしてみつけたよ
さむいあさフーフーあったかママの口
からっぽのゆうびんポストふゆのかぜ

〈俳句の紹介〉

俳句賞については給食時の校内放送で紹介した。毎月どの句が放送されるかどきどきして待ち、放送されると大きな拍手が起こる。楽しみな時間である。

学年だよりにも掲載して保護者にも紹介した。祖父母に俳句賞の小さな賞状を持って行って見せてほめてもらうなど、家族も巻き込んだ活動の広がりが見られた。

〈ミニ賞状〉

〈考察〉

児童は毎月の「はいくにチャレンジ！」を、とても楽しみにしている。回を重ねるにつれて、少しずつ五・七・五のリズムにも慣れ、指を折っては考え、季語を覚え、俳句に親しむ様子が見られるようになった。

保護者だけでなく、人生経験豊かな祖父母の方々がアドバイスしたり、ともに喜んだりする様子もうかがえ「俳都松山、めざせ、子規さん！」の盛り上がりが感じられた。

三　おわりに

月に一回の実践であるが、表現方法の一つとして確かな手応えを感じている。

感じたことや発見したこと、体験したことを、たとえ上手でなくても、自分の言葉で俳句にし、思いを共有したり伝え合ったりできることは、すてきだと思う。

今後も実践を継続し、言葉へのかかわりを深めていきたい。

たかすか　ともこ　愛媛県松山市立久米小学校教諭。子どもたちと学び合って楽しく実践したいと思っている。俳句も楽しんで実践中。